向陽介護便り

平成19年4月　第13号
発行人:㈲向陽介護システムズ
新宿区東五軒町1－12　青木ビル
TEL　03-3267-2015

家族の介護

平成１７年２月に「向陽介護センター」として、訪問介護の事業をスタートし、３年目の春を向かえました。

私が、この介護の仕事に興味を持ったキッカケは、６年前の父の死でした。父は大正元年生まれで、亡くなる１年前あたりまでは、すこぶる元気でした。母との二人暮らしをつつがなく続けていました。　ところが、すこしずつ認知症の症状が出始めるようになり、母との二人暮らしを続けることが困難になってきました。私を含め兄弟はそれぞれの事情があり、両親を引き取って暮らすという訳にもいかず、とりあえずは兄弟が交代で実家に様子を見に行くということにしました。

当時、私は高齢者の加齢に伴う身体的変化・機能低下といったことに対する知識は皆無であり、補聴器をはずしてばかりいる父に、何度も不快な思いを抱いたものでした。補聴器をつけないから父に話をするときには、大きな声を張り上げていました。　それが、父には怒られているように感じたのではないかと、今では思いやれますが、当時は、「どうして、聞き分けがないんだろう」と更に、大きな声を出したりしました。

次第に、父は昼夜逆転するような生活になり、一緒に生活している母にも影響が出始めたため、急いで、入所施設を探しました。今と同じように介護保険系の施設は満杯で、受け入れ先は、容易には見つからず、なんとか、介護保険外の施設を探し、入所させました。

ホッとしたのもつかの間、面会にいったところ父の手足にアザがあるのを見つけショックを受けました。それから間もなく父は肺炎になり、病院に入院し、半月後「もう十分生きた。有難う。」と言って、息を引き取りました。

十分なケアができたのか、はなはだ悔いが残りました。　当時　私は銀行員でしたが、将来はできれば介護に関係する仕事に就いてみたいと、漠然と思っていました。たまたま、縁があり介護の仕事を始めましたが、今度は母が介護が必要な状況となりました。父の時とは違い、知識も経験も十分に持ち合わせているはずでしたが、現実はそう上手くは運びませんでした。

じっくりと受け入れることができず、ついつい「何でこんなことができないの？」「どうして言うことをきいてくれないのか？」どうしても、イライラしてしまう私がいます。

母のもっともっと元気なころを知っているが故に、いつもいつも冷静に対応することが難しくなるのではと思います。

介護保険は要介護状態でも自宅暮らしを続けられるように介護サービスを利用し、家族介護からの開放を目指した制度と理解していますが、利用者増で税負担が予想以上に拡大したため、厚労省は、サービス抑制に方針転換し、昨年春の介護保険改定で「家族支援」を持ち出してきたと言われています。まだまだ　介護保険制度は始まったばかりです。真に利用しがいのある制度になるよう事業者として、努力していきたいと考えています。